

カレッジ情報誌 10月号、11月号のコラム「ボランティアの心」に第5回浜岡吉孝さん、第6回井上堅さんの紀行文が掲載されましたので紹介します。

伝承遊びで子らとあそぶ



濱岡 吉孝（福祉 4期）

ゲーム遊びしか知らない今の子に、私達が子供の頃夢中になって色々な玩具を作り、それを使って時の経つのを忘れて遊んだ経験を伝えたい。そして、子らと親しく遊び互いの理解を深めたいと4人の仲間と活動をはじめました...7年6ヶ月を経た現在、「むかしあそび研究会」は206人(卒業生と在校生)を擁する会に成長し、市内の小学校・幼稚園・諸施設・NPO「わ」などの要請に応じ、活発な活動を展開しています。

この活動の中で数々の得がたい体験をしましたが、その2~3を述べさせていただきます。

人間関係が広まり、深くなったこと

一つの行事を完結するには会員相互の密接な協力関係(立案・連絡・玩具の準備・役割分担・当日の有機的な活動等)を欠かすことができません。これら一連の過程を通じて1~15期生の縦の連携、また、それぞれの期における異コ ス間の人々の横の結びつきが回を追う毎に強固になっていきました。これは、この活動以前には経験のなかったことで、人間関係の広まりと深まりを大変うれしく思っています。

子らの真の姿を知ることができたこと

『今の子は...』とよく言われますが、実際に親しく接した子らは、どの子も子供らしく、素直で好奇心旺盛、遊ぶことが大好きで、子供たちの真の姿は今も昔もまったく同じという思いを抱きました。そして、日本の未来はけっして暗くない。大人が良い手本を示し、皆で大切に育てなくては、との感を深くしました。

天与の恵みを授かっていること

童心に帰り子らと夢中で遊ぶ中で、元気一杯の子らから若さと活力を贈られ続けています。私達はこれを天与の恵みと言っています。

これらの思いは206人の会員が活動を通じて肌で感じている最大公約数的な喜びの経験であると思えます。.....このほか、7年間の活動から枚挙にいとまがないほど多くのことを学び教えられました。この活動との出会いに心から感謝している昨今です。

「ほかの遊びも教えてね。また遊ぼうね。きつとね！」

いう可愛い誘いに応え、これからも子らと遊び続けたいと思っています。

無理せず、気張らず、気楽に

井上 堅（福祉 8期）

「出会いと学びの3年間、新たな人生の展望を」のフレーズに惹かれて、カレッジに入学。そして混声合唱団コーロKSCに加わり、福祉施設へ歌に行くようになったのが、私のボランティアの始まりです。

当初は「聴いて貰う」ことが中心で、相手方は無表情・無反応の場合が多かったのが実情でした。ある時「最近の卒業式では『仰げば尊し』を歌いません。皆さんは思い出深いはずです。一緒に歌いませんか」と誘ってみたところ、歌詞カードなしで、しっかりと正確に歌えるではありませんか。そして「今日はよかった、楽しかった」という言葉と笑顔がえってきました。共に歌うことを通して、心の触れ合いの大切さを教えられ、ボランティアのあり方を考える契機になりました。

歌の紹介も、その時代の思い出や背景を一緒にとりあげるようにしています。例えば「夕焼け小焼け」は「牛に引かれて善光寺参りの善光寺さんの鐘音をイメージして作られた曲」だとか、懐メロを歌う時は、歌手本人の映像や映画のシーンを用意する。あるいはクイズにしたり、共感できる話題を提供したり、いろいろ工夫すると、訪問先の方たちも大いに乗ってくれます。今では手話コーラスでも同じ方法を取り入れ、施設側から友愛訪問を楽しみに待って貰えるようになりました。

このような活動を5年続けていますが、長く続けられたのは自分の出来ることを無理せず、気張らず、気楽に活動してきたからでしょう。善意の押し付けではなく、相手が求めているニーズに合わせ、楽しいものになるように心がけると、その気持が相手にも伝わります。「ありがとう」「また来てね」の言葉は、何ものにも代えがたい、大きな喜びです。

ボランティアは、しんどいことも多いですが、喜んで貰えて自分も楽しめる活動です。ただ続けるだけではマンネリ化しますから工夫や勉強が必要です。経験や知識、得意なことや趣味を生かして「人のために出来ることがある」ということは、自分自身の「生きがい」にもなっているように思える昨今です。